

巻頭言 「スナフキンと聖書」

宇野 元

スナフキンは「ムーミン」の登場人物。テレビで観た人なら、印象的な音楽と共に颯爽と登場する姿が記憶に焼き付いていると思います。わくわくしました。シルクハットのムーミンパパも好きでした。勇敢なミイや、ふしぎな生き物たちも。「ムーミン」の大きな魅力は、多彩で面白い登場人物（や生き物）が出て来ることでしょう。どの登場人物も、すこし変わっています。でも、みんな自分ではちゃんとしていると思っている。私たちとよく似ていますね。しかもそんな一人一人が、なんとどのびのびと個性を発揮することか。

「ムーミン」はフィンランドの人が生んだ作品。日本にも同じような特色をもった作品があるだろうか？ はじめのうちは思い浮かびません。しばらく頭を捻っていると、ぽつり、ぽつり出てきます。ドラえもん、ゲゲゲの鬼太郎、七人の侍…… 個性についてのセンスには国境を越える普遍性があると、改めて気づかされます。けれども一方では、どこの国の社会も画一化の傾向をもち、またどこの国の人も自分自身のうちに自分を生かせないところがあるため、これらの作品が歓迎されるのでしょうか。

思えば聖書こそ、多彩な人物にあふれた書物であると思います。そして三者三様の「アブラハム、イサク、ヤコブ」の神として自己紹介される神こそ、私たちの神にふさわしい、と。個性の観点からは、使徒たちの手紙における一致の勧めにおいても見逃せません。エフェソの信徒への手紙 4章 16節には、次のように記されています。

キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わせられ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ……

キリストにある教会の一致は、画一的な一致ではなく、たとえば合唱における一致になぞらえられる、と言えるでしょう。一つであることが、各自が自らであることを消し去りません。むしろ、各パートが、他のパートに引っ張られず、迷いなく自らの音を出すことによって豊かな演奏が生まれる、そのような一致です。神は自らの家の建設に役立つように、私たち一人一人に賜物と、それに見合う委託を授けておられます。ですから、授けられているものに忠実でありたいものです。キリストにあるなら、そうする勇気が与えられます。また、ほかの人も委託を与えられているのだと信じて、とくに、自分と異なる種類の賜物をもつ兄弟をみとめ、その人が自らを用いることができるよう励ます心が与えられます。